

つるた町民ライブラリー



コロナ禍で様々な活動が制限される昨今。この企画では、「ヒト・モノ・コト」を繋げるため、私（地域おこし協力隊：川口）が、鶴田町で活動する「人材＝人財」（個人・企業・団体）をピックアップして「よそ者」目線で人物像を掘り下げ、不定期でご紹介します！今回は鶴田町でりんご農家を営む中野光彦さんにお話を聞いてきました。

VOL.9

りんご農家 中野 光彦さん

心をこめたリンゴ 人とつながっていく



お客さんからの 「美味しい」が一番の喜び

りんご農家の1年について教えてください

まずは冬に枝の剪定から始まります。その年だけではなく、その木の何年何十年と先を考えながら枝を落とします。各農家の考え方や木の特徴によって剪定の仕方が変わってくるので面白くもあり、難しい作業です。春になると摘花や受粉作業ですね。実がなってきたら摘果・袋掛け・葉取り・つる回しと作業が続いて秋口から収穫となります。若干の時期のずれや細かい作業は農家さんそれぞれで違う場合もありますが、だいたいそのような流れで一年を過ごします。

長年りんご農家として活躍されていて、最近何か変化がありましたか

これはすべての農家さんに当てはまるかはわかりませんが、以前は収穫したものを市場にもっていくというのが収入の中心でした。しかし最近個人のお客さんへの直接発送、企業と契約して取引、産直売り場など販路が多様化してきたように思います。実際に私たちにも個人のお客さんが年々増えてきています。販路が増える、もしくは変わるとどうなるかという、求められるりんごが変わってきました。市場に卸すりんごは生産者の情報が消費者まで届くことはあまりないかわりに、りんごの見た目が重視されます。逆に個人のお客様や契約企業様に求められるのは見た目よりも味です。美味しければその分リピートにつながります。農家に限った話ではないと思いますが、直接やり取りをしたお客様からの美味しかったという感想やリピートの注文、新しいお客様の紹介はとてもうれしいです。

農業の楽しさを 若い世代に知ってほしい

農家への想いを教えてください

私自身農家なので農家としての気持ちですが、やはり農業はとても重要な産業の一つだと思います。当たり前ではありますが普段食べているお米や野菜、りんごを含めた果物が無くなってしまえば大変です。世界で災害や戦争など想像を超える出来事があったときに食べ物は絶対に必要だと思います。自分で育てたものを人に食べてもらい喜んでもらって生活できる楽しさに加えて、最近では技術が発達したり社会から見直されてきたりと新たなやりがいも生まれていると思います。今の子どもたちや若い世代には様々な職業選択の中に農業も加えて考えてもらいたいですね。

子供たちに自然に触れる 機会を提供していく

鶴田の子供たちへの想いを教えてください

子供たちには農家も含め自然への触れ合いを体験してほしいという気持ちがあります。土日でも畑から子供の声を聞くことがなくなりましたし、さみしいですね。ですので、私の活動の中では学校と連携した収穫体験や昔の遊びを体験してもらったりしています。以前、イタドリ(山菜)を笛にして吹いてみたり笹をコップにしてみせたり、というのを子供に見せたらびっくりして面白がってくれました。そのような体験や知識も伝えていきたいです。遊びにしても今はゲームが好きな子供が多いと思いますが、遊び方を知って遊んでみれば自然も面白いというのを知って欲しいですね。

その上で将来について、農家も面白いかもと考えてもらえるようになればいいなあと考えています。もちろん楽しいだけではないですし、お給料が安定している仕事も魅力的だと思いますが、自分の頑張りや愛情が生活の糧になる農家も、私は十分に魅力的な職業だと思います。人口減少はこの市町村でも大なり小なりある中で、休耕地となっている農地はたくさんありますね。

編集後記

中野さんの奥様や娘さんには華の会の農家レストランでお世話になりました。その縁もあって今回インタビューさせていただいたのですが、中野さんご自身もとても気さくな方でした。インタビューを通して中野さんは農家という仕事に対して誇りと愛情をもっているんだなと感じました。鶴田町の基幹産業でもある農業ですが、全国的にも後継者問題や休耕地問題を抱えています。協力隊の先輩である山田さんのように、農業に興味のある方に鶴田町の情報を届けられる仕組みを考えていけたらいいなと考えさせられました。

それと同時に、子供たちにも農業についてもっと知ってもらい、イメージできるような環境を作れたらいいなと思いました。鶴田町は農業が身近にある町ですが改めて客観的に考えてみると、大人も子供も、自然や農業・田舎暮らしについて気づくこともあるかもしれませんね。